

『こころ』先生と私

Junko Higasa 2015.6.13

漱石作品は、一人の作中人物の上に色々な人の特徴や体験が織り交ぜられているが、『こころ』でも気になる人物がいる。それは同じ陸軍で西南戦争を共にし、生涯親友であった乃木希典と寺内正毅である。

乃木希典は、明治40年に陸軍大将のまま学習院院長に就任した。その当時の学習院の遊泳先は、片瀬江ノ島である。先生と私が出会ったのは鎌倉の海で、規則正しく海に入る先生は、乃木の投影のようにも見える。そして東京へ帰ってからも二人は三日と空けずに酒を飲んだそうだが、それは東京に帰った先生を頻繁に訪ねて、時に酒を飲む「私」に重なる。

乃木より3歳年下の寺内は、乃木最後の遺書を受け取り、総理大臣の桂太郎と共に殉死の後始末に奔走した。それは先生の遺書を受け取った「私」のようでもある。乃木は静(子)夫人と共に自刃したが、先生は妻の静を残した。作中には描かれていないが、おそらく遺書を受け取った「私」は、その後始末に奔走することだろう。

寺内正毅は、満鉄設立委員長、陸軍大臣、朝鮮総督を経て大正5年に第18代内閣総理大臣に就任する。まさに将来『貴方は外の方を向いて今に手を広げなければならなくなります』という人物であった。

35年間心に苦しみを抱いて生き続け、明治時代と共に世を去った乃木と、未来へ向かって活動しなければならない寺内にも、先生と「私」が垣間見える。